
人妖が望んだ儚き夢

銀鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人妖が望んだ儚き夢

【Nコード】

N7471Y

【作者名】

銀鳩

【あらすじ】

現代世界とは違い、妖怪や神々、妖精らが集う不思議な土地――
―幻想郷。
そんな人外魔境の幻想郷で、自由気ままに生きる一人の男を描いたお話。

ほのぼの路線でやっていくつもりです。基本駄文、更新速度鈍亀。誤字脱字、キャラ崩壊、自己設定等も含まれますので、地雷原に特攻したいという方のみご覧下さい。

プロローグ（前書き）

どうも、この度東方小説を書く事となった銀鳩です。

処女作なので、文章力は底辺に近いレベル……まさか小説書くのがこんなに難しいとは思わなかった。

これは作者の妄想混じりの小説ですので、原作ブレイクが嫌な人は戻る事をお勧めします。

作者の糞駄文を見て忍耐力をつけたい！ という方のみ閲覧推奨します。

ブローグ

障子や襖等、日本の和室を連想させる造りをした部屋の片隅で、一人の男が目を覚ました。

男はそれまで自分の身体を覆っていた染みだらけの布団を払いのけ、ゆっくりとした動作で立ち上がる。

ぼろぼろに千切れた衣服を引きずりながら、のっしのっしと歩を進める。

五、六歩ほど歩き、今にも壊れてしまいそうな朽ちた机の前まで来ると、男は歩みを止め、首を下に向けて机を見下ろした。

机の上には手紙がひとつ。長々とした長文が、とても丁寧な筆跡で書かれていた。

男はそれを手に取ると、無表情のままぐしゃぐしゃに握り潰し、机の隣へ放り投げた。

同じように潰れて丸くなった手紙の山に、先程潰した手紙が上に乗る。

手紙を捨てる。それが眠りから覚めた男が始めにする事だった。

毎日毎日、手紙はどこからともなくやってくる。男はその度に丸めて捨てる。一文字すら読まずに。

手紙を捨て終わると、男は四方を囲む襖の一つを開いた。

そこには池や庭石が置かれた美しい庭園……ではなく、男を覗く無数の目玉と、黒ずんだ紫色で塗りつぶされた空間が、どこまでも果てしなく広がっていた。

常識的にありえない。しかしそんな異様な光景を目の当たりにしても、男は眉一つ動かさず、淡々と外を眺めている。常人が見ればおかしくなりそうなこの光景も、男にとっては既に見慣れた景色だった。

男はしばらく棒立ちのままじっとしていながら、やがて飽きたのか襖をぴしゃりと閉め、また布団の中へと戻っていった。

ここがどこなのかはわからない。

現世？ 冥界？ いいや、どちらも違う。

ただ一つ言える事は、ここが男を罰する為に用意された牢獄ということだ。

密室となっているこの部屋だけが、男が存在する事を許された唯一の場所であり、今の男の全てだった。

男は二度寝から目覚めた。日付が変わったかどうかはわからない。太陽や月が見えないこの部屋では、時間の感覚など曖昧だ。否、長い監禁生活の所為で、もはや時間という概念自体が失われている。

男は確認するように辺りを見渡す。

全部いつも通り。何一つ変わった物はない。

やる事もないので再び眠りにつこうとしたその時、男は襖の外で妙な違和感を感じ取った。

急いで襖を開けてみると、いつもと変わらない目玉と空間。格別おかしい箇所などどこにもなかった。

気のせいかな。そう思い、男は襖を閉じようとしたが、下の方からピキピキと、ガラスにヒビが入るような音が聞こえた。

音に気づいて見下ろすと、空間にヒビ割れが生じ、その隙間から竹

林の景色が映しだされていた。

男は戸惑う長い年月をここで費やしてきたが、こんな事は始めてだった。そして戸惑いと同時に一つの考えが脳裏をよぎる。あそこに飛び込めば、この現世と隔絶された空間からでられるのではないかと。

だが絶対にそうなるとは限らない。失敗すればどうなってしまふのか……………考えただけで身の毛がよだつ。

しかし、このまま何もしくともこの牢獄に囚われ続けることとなるのもまた事実。男は、覚悟を決めた。

片足を部屋の外へ伸ばす。体を襲う浮遊感に身を束ね、徐々に体を傾けながら落下しそうなる……………が、寸前のところで足を引っ込めた。

男は少しの間目を閉じた後、くるりと反転し、丸めた手紙の山に近づいていき、一番上にある今日潰した手紙を手にとって懷に押し込んだ。

手紙をしまい終え、再び先程の位置に戻る。そして何かを呟いた直後。

今度は躊躇無く足を踏み出した。

男は消えた——いつも胸に抱いていた一つの想いと共に——

嵐の永遠亭（前書き）

はい、超展開ですね。自分でもわかっているんですが、この話の雑さと文才の無さは多分直らないでしょう。

今回は永遠亭キャラがでるよ！生温かい目で見ていってね！

嵐の永遠亭

四季の中でも一、二を争うほど過ごしやすいとされる秋の季節も終わりを見せ始め、本格的に冷え込んできた11月半ばのある日の夜。太陽が沈みすっかり暗くなった永遠亭の門前に、携帯サイズの箱を持った一人の人影があつた。

「へくしゅっ！ うう、寒…… 思いのほか遅くなっちゃった…… やっぱりに薬売りなんて向いてないと思うんだけどなあ……」

くしゃみをしながらそう小さく呟く声の主は大きな木製の門を開け、ブツブツと独り言を言いながらゆっくりと歩いていく。

およそ数百人は入るであろう庭を通り越して玄関まで辿り着くと、入り口に取り付けてある灯籠が、

暗闇のせいであつたらしく見えなかった姿を鮮明に表していく。

白のブラウスに赤いネクタイ、更にその上に紺色のブレザーを着用し、下は白を多く含んだ薄桃色のミニスカートを穿いている。

腰まで伸ばした薄紫色のロングヘア、頭の上に生えている少々長めな兎の耳に特徴的な真つ赤な瞳。

容姿や服装、声の高さからして、この声の主が少女であることは間違いないだろう。

少女は玄関の戸を開け自分が帰ってきたことを知らせると、誰かが畳を歩く音と共に手前の襖が開いた。

「おかえり鈴仙。今日は随分遅かったね」

「ただいまてゐ。私もこんなに時間が掛かるとは思ってたわ」

襖からでてきた少女、いや幼女が玄関先の少女に話しかける。そし

て鈴仙と呼ばれた少女も、同じように恒例の挨拶を交した。

幼い顔立ちにくせ毛の短めな黒髪、その上にはふわふわとした兎耳が生えている。

身長は低く、人参を模ったペンダントを首にぶら下げ、桃色のワンピースを着た幼女、因幡てゐが迎えにでてきたのである。

波長を狂わす狂気の瞳を持つ月の兎、鈴仙・れいせん・うごんげいん優雲華院・イナバと人間を幸せにする力を持つ地上の妖怪兎、いなば因幡てゐ。この二人は永遠亭の住人である。

他にも二人の師である薬師やこの屋敷の主人、てゐの部下の妖怪兎たちが住んでいる。

それぞれが自分に与えられた仕事をこなしながら、忙しくも充実した日々を送っていた。

ちなみに鈴仙の仕事は全容全般。

主のお守りや師の手伝い、家事やお使い等が主な内容である。

今日も仕事の一つである人里への薬売りを終え、ようやく自宅へと帰ってきた。

そして今は今夜の夕食を作る為に一緒に調理場へと向かっている。

「はぁ……今日はもうお風呂入ってすぐに寝たいわ……」

「鈴仙がそんなに疲れてるなんて珍しいね。人里でトラブルでもあったの？」

疲れの混じった声で喋る鈴仙に、てゐが何があったのかを聞きだそ

うとする。

「そんな面倒事には巻き込まれてないわ。薬が飛ぶように売れて忙しかっただけよ」

「あー……それで手間取っちゃったってわけかあ。鈴仙って人付き合い下手だもんね」

痛い所を衝かれたのか、「うつ……」と、唸る鈴仙と納得した、という表情のてゐ。

そんな小言を話していると、いつの間にか目的地の調理場まで到着していた。

中へ入ると複数の妖怪兎、通称イナバが食事の準備をしていた。

手伝おうかと思ったが既に作業は殆ど終了しておりやる事が見つからなかったので、てゐは用事がある為自分の部屋へ、鈴仙は帰宅した事を自分の師匠へ報告しに行った。

同じ様な外見の景色をしばらく歩いた後、とある襖の前で立ち止まる鈴仙。

そして目の前にあるその襖を、スパーンと勢いよく開けた。

部屋の中は薄暗く、周りは不気味な色をした液状の物体が入った瓶を収納した薬品棚で囲まれており、中央には机に向かって熱心に何かを書いている人物が座布団に座っていた。

「師匠、ただ今戻りました！」

声に気づいたのか、機械の様に高速で動いていた筆はぴたりと止まり、師匠と呼ばれた人物が鈴仙のいる方向に振り返る。

「あらウドンゲ、おかえりなさい。こんな遅い時間に帰ってくるな

んで、一体どんな道草を食ってたのかしら？」

赤と青を基調とした左右できっちり色分けされているツートンカラーに所構わず星座が描かれている珍しい服。

長い銀髪は三つ編みにし、頭の上には赤十字のマークが刻まれている青のナース帽を被った女性が、やや皮肉った口調で返事を返した。

彼女の名は八意永琳。やじろえりんありとあらゆる薬を作り出す事ができ、この永遠亭を実質的に仕切っている凄腕の薬師である。

「その…今日は沢山薬が売れて忙しかったので…」

「人見知りの貴方は緊張していつもより時間が掛かってしまった…
…つてところかしら？」

「はい……」

必死に弁解する鈴仙の顔を見て、瞬時にして何があったのかを悟った永琳。

「そんなに構えなくてもいいわ。少し遅れたくらいじゃ怒ったりしないから」

「あ、ありがとうございます！」

それまでと会った時よりもさらい暗い感じになっていた鈴仙だったが、永琳の言葉を聞いた途端暗かった表情がぱっと明るくなった。おそらく永琳に叱られると思っていたのだろう。

安堵した鈴仙を見た永琳は苦笑を浮かべた後、さらに言葉を続ける。

「何はともあれご苦勞様。他に伝えることはある？」

「はい。そろそろ夕食の時間なので師匠も少し休憩してはどうかと思ひまして」

「うーん……そうね、わかったわ。それじゃあ食事にしましょうか」

永琳は先程書いていた手帳な様な物を机の中にしまい立ち上がると、鈴仙と一緒に食堂のある方へ歩いて行った。

「そついえば、今日は竹林の様子が少し変なのよね」

食堂へ向かっている途中、不意に永琳が口を開いた。

突然発せられた脈絡の無い話題に、どう反応して良いのかわからず戸惑う鈴仙。

「変……ですか？」

鈴仙はいろいろ考えた結果、最初に頭に浮かんだ疑問をそのまま永琳にぶつけることにした。

「ええ、今日は何かザワザワしてると言うか……何時もと比べて騒がしいというか……まるで嵐がくる前触れみたいな感じなの」

「そうなんですか？ 私は特に何も感じませんでしたけど……」

「……やっぱり私の思い違いかしら……」

永琳がそう言い終えた直後、後ろから一人のイナバが「永琳様ー！」と大声を出しながらこちらへと走ってきた。

「あらあら、そんなに慌てて走ったら転ぶわよ？」

「す、すみません！　で、でも、大事な用があるんです！」

「「大事な用？」」

まったく同時のタイミングに喋り、見事に声が重なった永琳と鈴仙。

「は、はい！　とにかく私に付いて来て下さい！　は、早くしないと……！」

声は震え、体はおどおどと落ち着きがなく、何か恐ろしいものを見たような青ざめた顔から、

二人共ただ事ではないという事だけは理解できた。

「……すぐに案内しなさい」

いつもの様な穏やかな表情は消え、鋭い目付きへと変わった永琳。その威圧感に一瞬たじろぐイナバだったが、すぐに正気を取り戻し、青ざめた顔に戻った。

「は、はい！　こつちです！」

そう言うときイナバは振り返りさつき自分が通ってきた道へと走って行き、その後を永琳と鈴仙が追いかける。

「それで、一体何が起こつたの？　いつものあなたたちからは想像もつかない慌てぶりなんだけど……」

まだ状況が理解できていない鈴仙が走りながら説明を求める。するとイナバはびくりと全身を震わせた後、おぼつかない声で話し始めた。

「つ、ついさつき救急の患者さんが来たんですけど……その人、体中傷だらけで……今にも死にそうなんです!!」

イナバが簡潔に説明を終えると、永琳の表情が一段と険しくなった。

「……で、その患者はどこにいるの？」

「玄関にいます！ 別の場所に移そうと思ったんですけど……大人の人だから私たちだけじゃ持ち上げられなくて……」

「無理に運ばなくてもいいわ。下手に動かして失血死でもされると大変だから」

「そうですか……。あ！ 見えてきました。あそこです!!」

走り続ける事早数分、ようやく見えてきた玄関を力強く指差すイナバ。

その指先の方向には一足先に現場に着いていた因幡てゐと数人のイナバ、そして粘り気のある血糊がべったりとへばり付いた壁にもたれかかっている一人の男の姿があった。

すぐに男のもとへと駆け寄ったが、その無残な姿に永琳達は驚愕した。

顔こそ目立った外傷は無いものの、靴を履いていない両足と右腕の皮膚は醜く焼けただれ、千切れた衣服の隙間から見える身体はいくつもの創傷が痛々しく刻まれており、腹部に巻かれた晒は大量の血を吸いドス黒く変色している。

そして、男には本来付いているはずの左腕が、肩ごと丸々無かった。普通の人間ならとくに死んでいてもおかしくないほど傷だらけだが、男は吐血しながらも荒い呼吸を繰り返し、まだ完全に事切れてはいなかった。

「……息はあるみたいだけど、かなり危険な状態ね……。てゐ、ウ

ドンゲ！ 彼をすぐに医務室に運んで！ くれぐれも慎重に運ぶように！ 落としたら承知しないわよ！！」

男の脈を確認した後、怒鳴りつけるような大声で指示をだす永琳。それまであたふたとしていたイナバたちも、永琳の一言ですぐさま我に返った。

「いい、てゐ？ そーっと持ち上げるのよ？」

「う、うん。わかってるよ……お、重い……！」

鈴仙とてゐは先程永琳に命令された通り、なるべく傷口を刺激しないようにゆっくりと男の体を持ち上げると早歩きで医務室へと向かって行った。

道中、男から発せられる怨霊のようなうめき声に耐えつつ長い長い廊下を歩くと、ようやく医務室の表札が書かれた襖が見えたことで少しほっとする鈴仙とてゐ。

しかし安心したのもつかの間、この後には男を治療するという大仕事が続いている。二人は深く深呼吸をし息を整えると、意を決して前にある襖を開いた。

「遅いわよ！ 何をもたもたしてるの！ 早く彼をこっちに連れてきなさい！」

襖を開くと同時に、手に持った薬品を丹念にチェックしている永琳の怒号が飛んできた。

どうやら既に準備は終わっているらしく、永琳の傍にはふかふかの真っ白な敷き布団が引かれており、その隣には、剪刀や鉗子、輸血パックなど手術で使うような専門的な物から、

ガーゼや包帯、消毒薬といった一般の医療器具まで幅広く揃えられ

ていた。

鈴仙とてゐが男を布団へ寝かすと永琳は手馴れた手つきで素早く道具を持ち、さっそく治療を始めようとする。

……が、ほんの僅かな間硬直した後、なぜか道具を元の場所へと戻し始めた。

「……？ 師匠、どうかしたんですか？」

突然の謎の行動を取る永琳に困惑する鈴仙。

どうして早く彼を治療しないのか。

早くしないと取り返しがつかなくなってしまうのではないだろうか。なのになぜ、自分の師は動きを止めているのだろうか。

鈴仙のそういった考えは尤もだったが、永琳から返ってきた返事は鈴仙にとって予想外の言葉だった。

「ウドンゲ、貴方はこの部屋から出なさい」

「……え！？」

鈴仙は理解できなかった。これまで永琳が仕事をする際は、全てとはいかずも大抵は鈴仙が補佐を勤めていた。

だから今回ももちろん自分が手伝うものだと思っていた。

「ど、どうしてですか！？」

あくまで平常を装っているが、やはり動揺を隠し切れない様子の鈴仙に、永琳はその理由を話した。

「どうしてって、そんなの決まっているでしょう。 貴方が血を見

たり、誰かが苦しむ姿を見るのが嫌いだからよ。

これからこの部屋は、おびただしい量の血液が飛び散り、痛みに喘ぐ声が響き渡るわ。貴方、そんな所に長時間居て耐えられる？

一瞬たりとも目を背向けずに、彼の治療を続けられる？」

「ですが……！」

「それに貴方、今もびくびく震えているじゃない。そんな危なっかしい手先じゃ、とても患者は任せられないわ」

言われて初めて、自分の身体が小刻みに揺れていることに気づいた鈴仙。

なんとか動きを止めようと必死に腕を押さえるが、いくらやってもその震えは止まらない。

「もういいわウドンゲ。ここは私に任せて、あなたは自分の部屋に戻ってなさい」

「っ……」

永琳の言葉に責めるような調子は一切含まれていなかったが、鈴仙は何も言葉を返す事ができなかった。

実際に永琳の言っている事は正しい。今の手元がおぼつかない状態の鈴仙では、役に立つどころか足手まといになり得る。

最悪、些細なミスのせいで男が死に、それが彼女の新たなトラウマになってしまう可能性すらあった。

永琳が部屋をでていく様に命じたのも、全て鈴仙を思っただけの言葉だった。

鈴仙もそれをわかってか、反発する様な事は何もせず素直に永琳の言葉に従った。

「……わかりました……失礼します……」

今にも消えそうな声でそう言うと、鈴仙は永琳を一瞥した後、襖の奥へと消えていった。

「鈴仙……」

これまでの一部始終を見ていたてゐがぼつりと呟く。何か言いたげな表情をしているがそれ以上は一言も喋らず、鈴仙が出て行った襖をじっと見つめていた。

そんなてゐを尻目に、一人黙々と手を動かす永琳。

「……てゐ、今回はあなたに手伝ってもらっわ。……やれるわね？」

「……はい」

「そう。なら、すぐに始めるわよ」

以降は二人共無言になり、永琳は先ほど持っていた道具を再び握り締め、男の治療を再開した。

嵐の永遠亭（後書き）

というわけで第一話更新です！

何？ 駄文乙？ 皆の性格と口調が違う？

ごめんなさい、勘弁して下さい。これが作者なりに考えた結果なんです。

さて、一体次回はどうなるのやら……

目覚めた男（前書き）

えーと……その……あらすじに書いてあったほのぼの路線、今の話の流れを見るとはつきりいつて詐欺に近いです、はい。

もう少しこの殺伐とした雰囲気が続きます。のんびりしたい人ごめんなさい！（そもそも見てる人いるのかどうかわからないんですけどね）

目覚めた男

永遠亭に謎の男が転がり込んでから丸1日が経過した頃、屋敷の中はイナバたちの様々な憶測が飛び交っていた。いつもは静かな永遠亭も、今日に限ってはざわざわと騒々しい。

「あの男の人、あれからどうなったの？」

「昨日廊下で鈴仙様がどこかに運んでいるところを見たよ。それから先はわからないや」

「あんなにぼろぼろってことは、妖怪にでも襲われたのかな？」

等々、どこもかしこも男の話題で持ちきりだった。

だが当の本人はまだ医務室の中に籠りつきりな為、現状がどうなっているかはまるでわからなかった。

好奇心に負けたイナバが医務室の中を確かめようとする出来事も何回もあったが、中から聞こえる人とは思えない悲鳴に恐怖し、誰も中を確かめる気にはなれなかった。

今では中を確かめるどころか辺りに近づく者さえ殆どいなくなっていたが、一人だけ例外がいた。

その一人とは他の誰でもない、鈴仙だ。その後、永琳に命令され一度は自分の部屋に戻りはしたものの、やはり気持ちの整理がまったくつかず、ましてやこのまま眠ることなど到底できなかった。

とは言っても、中に入れば即座に永琳に追い出されるだろう。役に立たないと言う言葉と共に。

勿論その事は鈴仙も十分知っていた。

今の自分にできる仕事は何も無い。しかし、男が助かるようにと祈る事是可以。そう考えた鈴仙は、できるだけ近くで祈りを捧げようと、こうして医務室の前までやって来たのだ。

そして現在は襖の横で体育座りで両手を組み、永琳が出てくるのをひたすら待ち続けていた。

「あの……鈴仙様、大丈夫ですか？」

声に気が付いたのか頭の上の兔耳がぴくりと揺れ、それまで頂垂れていた頭を重たそうに上げる鈴仙。
見上げると、そこには心配そうに鈴仙の顔を覗き込んでいるイナバの姿があつた。

「……ええ……大丈夫よ……」

「でも、すごく顔色が悪いですよ……もう夜も遅いですし、今日はお休みになられた方が……」

イナバの言う通り、鈴仙の顔はお世辞にも良いとはいえなかった。昨日まで健康的だった肌の色は病人の様に青白く染まり、キラキラと光っていた赤い瞳はすっかり輝きを失い、その下には大きな隈ができていた。

「心配してくれてありがとう……でも本当に大丈夫だから……」

誰がどう見ても明らかに無理をしていたが、やはり鈴仙の返事は変わらなかった。

「そうですか……分かりました。でも本当に気をつけて下さいよ？
鈴仙様まで倒れてしまったら笑い話にもなりませんから……」

イナバは最後まで鈴仙を気遣う台詞を残すと、そそくさと何処かに行ってしまった。

その後姿を見送った後、再び元の姿勢に戻る鈴仙。

結局、この日は永琳がでてくる事も、男の悲鳴が止む事もなかった。

どれくらいの時間が経っただろうか。

長かった夜はすっかり明け、空高くには太陽が上がりその下を小鳥が楽しそうに飛んでいる。

時刻は朝、いつも寝坊気味のイナバたちもそろそろ目覚める時間になっていた。

……と言っても全てのイナバが自然に起きるわけではなく、たまたま早く起きた少数派がまだ寝ている者を起こしていくので、まだ全体の7割弱は夢の世界の住人の仲間入りをしている。
それと、夢を見ていたのはイナバたちだけではなかった。

「ううん……人參に蜂蜜かけるとすつごくおいしいのお……」

医務室の前で聞こえる小さな寝言。そこには、小動物のように丸まった鈴仙が眠っていた。

昨夜までは気合と根性で何とか眠気を抑えていたのだが、人里での薬売りと今まで一睡もしていない疲れが重なり、ついに睡魔に負け寝てしまったのだ。

口元は緩み、すうすうと寝息をたて幸せそうに眠る鈴仙。そんな鈴仙を呆れた眼差しで見つめる一人の女性がいた。

「……まったく、何やってるのかしらこの娘は……」

女性はふう、とため息をつく、鈴仙の肩をゆさゆさ揺らした。

「起きなさいウドンゲ。こんなところで寝てると風邪ひくわよ」

「えへへ……師匠、いくら好きだからって、私はそんなに食べられませんよぉ」

しかし女性の行動もむなしく、鈴仙が起きる気配は一向にない。

「もう、早く起きないと新薬の実験台にしちゃうわよ」

「うひゃあ!？」

女性がそう言った瞬間、鉄砲弾のような勢いで飛び起きる鈴仙。薬の実験とはそんなに恐ろしいのだろうか。

「すみません師匠!　どうかそれだけはご勘弁を……って、あれ?」

鈴仙は目覚めてまだ間もないが、先程の言葉がよっぽど強烈だったらしく意識だけははつきりとしていた。

だが現状は完全に把握できていない為、立ち上がって辺りを見回している。

するとすぐに自身の目の前に立っている女性、八意永琳と目が合った。

「……そんなに嫌がらなくなたっていいじゃないの……」

「え、あ!　し、師匠!　ということは……」

何時の間にか声が止んでいることに気づいた鈴仙。

そして目の前には永琳。それ即ち、治療は既に終了しているということだ。

鈴仙は期待と不安を混じらせた顔で永琳を見つめる。

永琳も鈴仙が何を言いたいのかはよくわかっていた。

「ええ、ついさつき終わったところよ。……何とか一命を取り留めることができたわ」

「よ、よかったあ……」

安心したのか、体からすっかり力が抜け、へなへなとその場に座り込む鈴仙。

「本当、久しぶりの大仕事だったわ。ショック症状を起こしたから麻酔は使えなかったし、

身体は身体で器官はズタズタ、肺は片方潰れてるわで、大変なんてレベルじゃなかったわね。

それに——」

身体の損傷具合や治療の詳細を数分間かけて細かく語り始める永琳。ようやく話が終わる頃には、彼女自身もしゃべり疲れたといった感じだった。

「……で、どうして貴方はここに居るのかしら？ 私は部屋に戻れと言ったわよね？」

「そ、それは……」

永琳の質問にはつきりとした説明ができず、言葉を濁す鈴仙。普通に祈っていたと言えればいいのだが、どうも答えたくないらしい。

しかし執拗に続く永琳の問いかけに耐え切れなくなり

「……………祈ってました……………」

耳を澄ましてようやく聞き取れる程度の声で白状した。

「……………祈ってたの？　一晚中ずっと？」

「……………はい」

「そう……………ふふっ」

「？　師匠、どうかしました？」

どこか嬉しそうな笑みを浮かべる永琳に疑問を感じた鈴仙が質問するが、永琳は質問には答えず、ただ微笑を浮かべるばかりだった。

「さて、それじゃあ私は姫に報告をしてくるわ。一昨日からずっと会っていないから心配してるだろうし。

ウドンゲも少し休んだ方がいいわよ。顔に疲れがでてるから」

永琳はそれだけ言い残すと、欠伸を噛み殺しながら姫と呼ばれる人物の部屋へと足を進めた。

一人残された鈴仙は、これからどうするべきかを考える。

「確かに疲れも溜まってるけど、まずは……………」

鈴仙は言葉を言い終える前に、手前にある襖を慎重に開いた。

「う……凄いいおい……！」

襖を開くと同時に鈴仙の嗅覚を刺激したものは、やはり血の臭いだった。

しかし、部屋の中は想像していたよりも遥かにさっぱりとしていた。

血の臭いこそ充満しているものの、畳や柱にはこれといった汚れはなく、どこからと言えば綺麗な方だろう。

血しぶきが飛び散った形跡もありなく、強いて言えば男が眠る布団の周りが少し赤く染まっている位しか指摘する事がない。

おそらく永琳が極力汚さないように工夫しながら治療したのだろう。そうでなければこれ程清潔さを保つことなど不可能の筈だ。

だが男の隣に座っている人物は違った。見覚えのある桃色のワンピースや幼い顔には、時間が経過し赤黒くなった血の塊がいくつも張り付いている。

「てゐ！」

その姿に思わず叫んでしまい、親友であるてゐの元へと駆け寄る鈴仙。

「……ああ、鈴仙か」

反対にてゐから返ってきた返事はとても素っ気なかった。それにいつものような元気も無い。

「この人なら大丈夫だよ。とりあえず峠は超えたから、しばらくは問題無いと思う」

「そうじゃなくて……」

「じゃあこの血？ そんなに心配しなくても後でちゃんと拭くから……」

鈴仙はもちろん血の事も心配していたが、それ以上にてゐの体調を心配していた。

「てゐ、一度自分の部屋に戻ったら？ かなり具合悪そうじゃない」「いや、私はしばらくこの人の様子を見てるから今はいいや。お師匠様にもそう言われてるし」

てゐも鈴仙と同じように男の心配をしていた。普段こそ”悪戯兎”と称されている彼女だが、本当はとても素直で優しい心を持っている。

尤も、その本心がでてくることが非常に稀なのが玉に瑕だ。どれくらい稀かというと花畑に入ったとき、自分の足元の花が全て四葉のクローバーだったというくらい稀である。

なので、今回の件は特に珍しいといえるだろう。

「それに、万が一容態が急変でもしたら大変だから……」

そして今もてゐは男の看病を続ける気でいた。それが今の自分のできる最良の選択だと信じているからである。

「そう。……だったら、私もここに残るわ」

「え？」

「聞こえなかった？ 私も残るって言つたのよ」

「な、なんで？」

てゐには鈴仙の考えがよくわからなかったが、その理由は本人が説

明してくれた。

「私も、この人には助かって欲しいから……。それに、一人より二人の方がいざという時素早く行動できるでしょう？」

布団の中で死んだように眠る男を、どこか悲しそうな表情で見つめながら話す鈴仙。

「……うん、確かにそうだね……。じゃあ、お願いしちゃおうかな……」

せつかなので、鈴仙の好意をありがたく受け取ることにしたてゐ心なしに、その顔は先程までと比べると少しだけ明るくなっていた。

「……」

二人が男を見守ること早数時間。

鈴仙もてゐも何か気分を盛り上げようとはしたのだが予想以上に話す話題が思いつかず、部屋の中は気まずい空気が漂っていた。

「……静かね……」

沈黙を最初に破ったのは鈴仙だった。それに釣られるように、てゐもずっと黙っていた口を開く。

「うん……さつきまでの悲鳴が嘘みたい。……そう言えばこの人、どこから来たんだろう?」

いまだ目が覚めない男を横目でちらりと見るてゐ。

それまでは忙しさのあまり顔もろくに確認できなかったが、今ならじっくりと眺められる。

どうせやる事もあまりないので、てゐは男の観察をして時間を潰すことにした。

年齢は20代後半から30代半ばといったところだろうか。

顔は怪我のせいか些かやつれており、顎の下には少量の無精ひげが生えている。

男にしては珍しく長髪で、背中まで伸びた白髪は黒い紐で後ろに束ねられ、肌の色も髪と同じく真っ白だ。

「見たところ人里の人間っぽいんだけど、それだったら竹林の中になんか入らないはずだし……」

「確かにそうね……あつ、もしかしたら外来人かもしれないわ」
「なるほど、確かにそれだと納得できるかも」

鈴仙の言う外来人とは、幻想郷に張られている結界が何らかの理由で不具合を起こし、それが原因でここに流れ着いた現代の人間を指す言葉である。

ただし大抵の外来人は出てくる場所が悪く周辺に生息する妖怪に喰われるか、どこに進めばいいのかわからずのたれ死ぬかでその短い一生を終えてしまう。

一方で人里の人間はよほどの重用がない限り里から離れようとはし

ない。

それもそのはず、この人里は”妖怪の賢者”と呼ばれる大妖怪によつて保護されているので里の中にいれば安全だが、ひとたび外に出ると理性の無い下級妖怪に襲われる危険性があるからだ。

よつて二人は男を外来人と判断し、たまたま竹林に迷い込んだところを妖怪に襲われたが何とか逃げ切り、運良く永遠亭に辿り着いたという仮説を立てた。

そんな事を考えていると、襖が開き一人のイナバが中に入ってきた。

「ああ、やっぱりここでしたか」

台詞からして、どうやら二人を探していたみたいだ。

「たった今昼食の支度が整ったので、お二人に報告に参りました」

「あ……もうそんな時間なのね……」

鈴仙もてゐは今までずっと時計を見ていなかったたので、イナバに言われてようやく現在の時刻が昼であることに気がついた。

それにしばらく何も食べていないこともあってか、二人ともとても空腹だった。

「ねえ鈴仙、ちょっとくらいなら平気だよね？」

「まあ……多分……」

どうやらてゐは食べ物への誘惑には弱いらしい。

鈴仙はここを離れるか空腹を満たすかでしばし悩んだが、やはり誘惑に勝てず後者を選んだ。

それでも男の看病という役目は十分に果たしただろう。そう結論付

けた二人は一旦医務室を後にする事にした。

「……ただ座ってるだけっていうのも退屈なものね」

その後、久しぶりの食事にありついた鈴仙とてゐ。

食事自体は二人とも手早く済ませたが、てゐは服を着替えてから戻る事にしたので、今の医務室には鈴仙と例の男しかいなかった。

「せめて、寝息だけでもあつたらいいのに……」

鈴仙は数時間前と何一つ変わっていない今の状況に少し嫌気がさしていた。

一番の原因は、この静寂。

元々鈴仙は騒がしいよりは静かな方が好みだが、今だけは音が欲しかった。

何か変化がなければ、ずっとこのままかもしれないという不安が募るからだ。

「ふあゝあ……この際私も寝ちゃおうかな……」

どうせ自分が起きていても変わることなど何もない。そう考えた途端、急な眠気に襲われた鈴仙は、その心地よさのあまり意識を手放しそうとする……が、脚に感じる違和感によって遮られた。

恐る恐る自分の脚へ目をやると、布団から投げ出された男の右腕が、

鈴仙の左膝を掴んでいた。

「ん……つつ……！」

まだ傷が傷むのか痛みには耐えるような低い声を漏らしながら、それまで閉じられていた男のまぶたがゆっくりと開いた。

周りを確認しているのか、まだ焦点の合わないぼんやりとした黒い瞳は何度も左右へ動く。

一方鈴仙は、男の手が自分の膝を掴んだことにまだ驚いていた。

「ど、どうしよう！ 師匠に報告……いやその前に……でも……！」

あまりに突然の出来事に頭が混乱していた鈴仙だったが、しばらく混乱した後、ようやく男の視線が自分に向けられていることに気づいた。

「え、えつと……その……こんにちは？」

とりあえず話しかけてみる鈴仙。だが男からの返事はなく、代わりに鈴仙の予想の斜め上に行く言葉が返ってきた。

「……可愛い」

それが男の第一声だった。

目覚めた男（後書き）

はい。おっさんが目覚めました。お気づきの方もいるかもしれませんが、一応彼がこの小説の主人公です。少女成分多い幻想郷に10代越した見た目のおっさんは違和感がががが

まあ、あれです。この小説は作者の妄想ですので、細けえことはいんだよ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471y/>

人妖が望んだ儚き夢

2011年11月24日16時55分発行